



宋代 官窯 青磁花瓶



白磁刻花唐草文碗 定窯



宋代 官窯 青磁花瓶

汝窯 官窯 哥窯 定窯 鈞窯 の五つが宋の五大名窯と称されている。

曜変天目（稲葉天目）建窯

南宋時代（12～13世紀） 施釉陶器

曜変天目は建窯の黒釉茶碗で斑紋の周囲に青色を主とする光彩があらわれたものをいう。本来、「曜変」は「窯変」を意味し、しだいに輝きを表す「曜」の字が当てられるようになった。完全な形で現存するものは、国内に伝存する3点のみ。本作は、光彩が見込み全体に鮮やかに現れた一碗。江戸幕府第3代将軍徳川家光から春日局に下賜されたといわれ、後に淀藩主稲葉家に伝わったため「稲葉天目」ともいわれる。1934年、岩崎小彌太の所有となった。



青磁鼎型香炉 南宋官窯 鷹さ 13.6cm

宮廷専用の陶磁器を焼く窯を官窯（かんよう）という。南宋時代、首都・杭州（浙江省）に置かれた官窯ではただ青磁のみが焼かれ、飲食器や祭礼の器などとして宮廷に納められた。青緑色の澄んだ釉色と複雑に入り組んだ釉薬のヒビ「貫入（かんにゅう）」が特徴で、本作は古代青銅器の鼎の形を写したもの。



重要文化財「白磁刻花蓮花文輪花鉢」口径

26.5cm 河北省の定窯（ていよう）は華北を代表する白磁の名窯で、その製品は温かみのある「牙白色（げはくしょく）」（アイボリーホワイト）の釉色と、薄い器胎に片切り彫り（かたぎりぼり）（刻花）で施された流麗な文様が特徴となっている。本作は茶の湯の水指として加賀藩主前田家に伝わった鉢で、瓜形に刻みをつけた器に蓮の花の文様が彫り込まれている。